

特集  
都市の地域力  
～都市を支えるソーシャルキャピタルの醸成～

Special Features  
Regional power of urban areas  
Creating social capital to support urban areas

文化芸術

Art and Culture

## 芝浦雑想

藤野雅統

FUJINO Masato

建築家/芝浦海岸町会商店会連絡協議会/  
芝浦運河ルネッサンス協議会/  
芝浦運河まつり実行委員会



### 1——芝浦というところ

芝浦、と、私たち地域に暮らす人々が呼んでいるのは、JR山手線田町駅東側の運河が巡る一帯、住居表示でいうならば東京都港区芝浦一～四丁目および海岸二～三丁目の地域である。面積約2km<sup>2</sup>、人口約19,000人、昼間人口約67,000人。人口は、この2～3年でほぼ倍増した。この地域の中で、芝浦一丁目町会、同二丁目町会、同三・四丁目町会、海岸二・三丁目町会という四つの町会と芝浦商店会が「芝浦海岸町会商店会連絡協議会」を構成し、行政や企業、他地域、団体などとの様々な連携やネットワークを形成しているのが、芝浦のまちの現在の姿である。

この「芝浦」という地名を歴史の中に探すならば、中世の史料に「芝(現在の田町駅～浜松町駅の内側)」の東側に広がる浜辺一帯の総称としての「芝の浦」(浦＝海辺・浜辺)という記述が見られる。その後時代を下るにつれ、塩や海苔を作るひなびた漁村としての記述が散見されるようになる。江戸後期～明治期となると、芝増上寺の東の海辺に広がる風光明媚な行楽地として知られ、江戸前の「芝えび」や落語の「芝浜」にその名を残している。ただし正確にいうならば、それらの記録は芝の人々の風景であり、現在の芝浦はまだ海の中である。

そして、明治の初期に当時の海岸線に沿って鉄道が敷設されて以降、隅田川河口の浚渫工事や東京港の整備事業、関東大震災の焼土瓦礫処理などに関連づけられながら、明治30年代末から昭和初期にかけて、つまり20世紀前半の数十年をかけて順次埋め立てられて現在見るおよその姿が形成されたのである。

さてこの芝浦という地名を耳にして思い描くイメージは、世代によって随分と異なるのではないだろうか。戦前の埋め立ての様子や活況を呈する花柳界の姿を思い

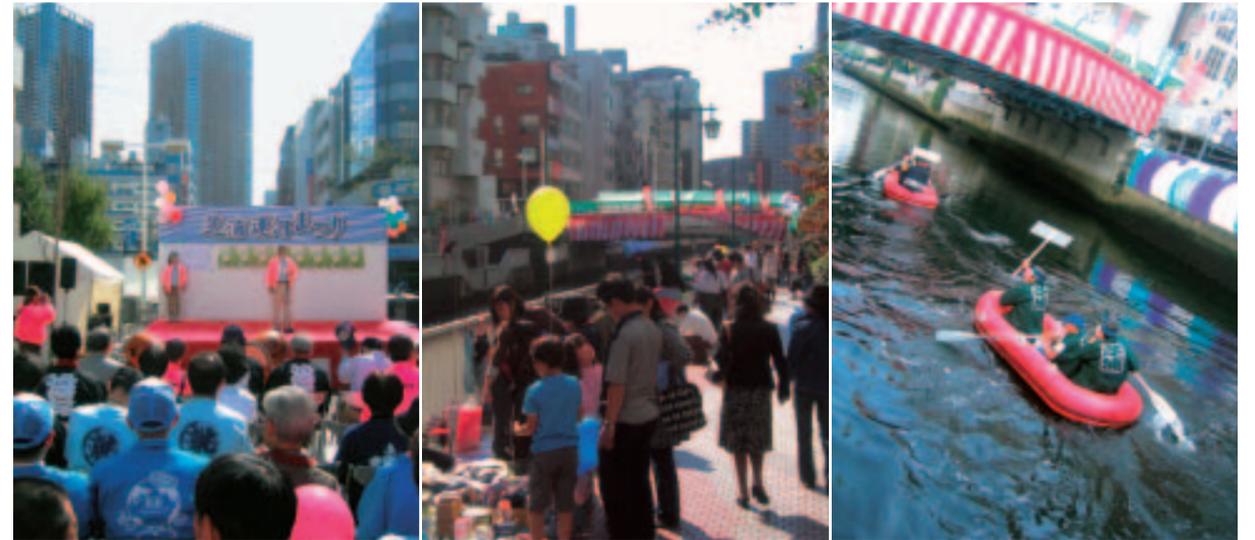
描く方は、もはや多くないのかもしれない。1950年代の水運と陸運の接する物流拠点としての活気や未だ残る花柳界の香り、1960～70年代の高度成長期の急激な都市化と生活スタイルの変化に伴う公害問題や水質の悪化、1980年代後半のバブル期のディスコなどの利他的な喧噪とその後の虚無感、そして現在では超高層マンションの林立する景観が一般的だろうか。あるいは1954年、復興の途に着いた芝浦に上陸し、高压電線バリアを引きちぎって、銀座や国会議事堂などの東京を破壊し尽くしたゴジラという“大物”を忘れがたい世代もいるかもしれない。

いずれも社会の大きなうねりの中の一コマであり、地域住民が主体的に選び取ってきたというよりは、その時代その時代を背景にした抗いがたい出来事である。しかしこのような多様な地域イメージがあるということは、様々な外因的な出来事に対して、それぞれに柔軟に対応してきたということの現れでもある。その中心となってきたのは、日本の他の多くのまちと同様、町会や商店会といった住民組織に他ならない。

その柔軟な住民組織では今、地域資産の見直しや再発見と、その利活用を可能とする住民ネットワークの形成を目指して、まさしく主体的・自律的な活動が始まっている。その一例がこの数年力を入れてきた「芝浦運河まつり」と「同ざこ市場」である。

### 2——大都会のど真ん中の「芝浦運河まつり」

今年で5年目となる「芝浦運河まつり」と「同ざこ市場」は、2003年秋に試行的に芝浦商店会が開催したプレイベントの賑わいを受け、2004年春に田町駅芝浦口のリニューアル竣工に合わせて第1回が開催された。芝浦というまちの様々な顔を見てもらおうという趣旨であった。3



■写真1—運河に架かる橋の上に組んだ運河まつりメインステージ  
■写真2—運河まつりの屋台骨「ざこ市場」。奥は紅白垂幕とテントで占拠された橋  
■写真3—運河まつり名物町会対抗ボートレース。パワーとチームワークの熾烈な駆け引き

会場に分かれてイベントを組んで、積極的にまちを歩いてもらおうという趣向は、あいにくの雨で十分に果たされたとは言い難かった。それでも雨に濡れながら、今頃あちらの会場はどうしているだろうか、などと、余所の心配をする“心持ち”などという収穫もあった。

翌年は会場を新芝橋と新芝運河周辺に集中させ、初夏に「芝浦運河まつりざこ市場」を単独に開催し、秋に「芝浦運河まつり」と「同ざこ市場」を開催し、以降このスタイルが定着した。運営組織も「芝浦運河まつり実行委員会」単独運営から、実働部隊としての「同ワーキング部会」が明確に位置付けられ、より機動性が増し規模も拡大した。

イベントは2日に分かれ、1日目の日曜日は地元愛好家団体による和太鼓の演奏で幕を開け、運河沿い遊歩道におけるフリーマーケット「芝浦運河まつりざこ市場」、一周15～20分の無料運河クルーズ、町会対抗ボートレース、ボート・カヌー体験などが催される。また橋の上に組んだ仮設ステージでは、地元の愛好者やサークルによるショーやマジック、バンド演奏などが彩りを添え、さらに模擬店での飲食も楽しい。その他に港区、東京都、国土交通省、地元団体、各種団体のブース展示なども設けられる。廃校となった小学校の給食用食器を利用してのリユース食器の採用は、洗浄、その他の労力は膨大であるが、区のバックアップもあり根付いている。

2日目の月曜日は、休日には出てこれない芝浦付近への通勤者の方々にも輪を拡げる意味で、夕刻から運河沿い遊歩道での模擬店やミニコンサートを開催した。秋の夜風の中、運河の水辺での一杯は、アムステルダムも

かくやという風情である。

いずれも昨今の芝浦という地名イメージからは若干を異にするかもしれない、上品とか洗練とかいう形容とはまた別の、大都会のど真ん中の密なコミュニティを楽しむことができるはずである。

### 3——漠たる焦燥感、町会と商店会

パワーに満ちたこれらの活動の根底にあるのは、実は“漠とした焦燥感”といったものであった。今のご時世、景気が悪い、と口にしない人はいないが、芝浦のまちは一部に見られるようなシャッター通りというわけではないし、まちを歩く人々の数も多く活力に満ちている。それでもなお焦燥感というのは、バブル期とその後の失われた10年、1993年のレインボーブリッジ開通、2000年前後の大規模再開発の足音と“新住民”急増の予兆、2000年代の田町駅東口の再開発という振幅の大きい流れの中で、何かしないといけない、という漠然とした感覚だったのかもしれない。

あるいは、超高層ビル群という建物ボリューム上の断絶、似たような世代が入居することになる分譲マンションによる世代バランスの不均衡、都心居住にありがちな希薄なコミュニティ参加意識、巨大再開発で話題となる様々な課題も現実のものとなりつつあるという空気。とりわけ芝浦ではそれら各種のギャップが、既存の濃密な地域コミュニティの内側に一気に持ち込まれるというあまり例のない状況にあった。

しかし考えてみれば、埋め立てによる100年の歴史しか持たない芝浦というまちは、そもそも余所から来た



■写真4—ご縁とタイミング(と天候)さえ合えば運河ウエディングも可能



■写真5—「芝浦・協働会館」前を巡幸する神社御輿



■写真6—普段は入ってこない奥の運河に浮かぶ屋形船のクルーズと江戸前料理



■写真7—超高層マンションを背に御神輿をおさめる

者の集まりだったわけである。「三代住まないと江戸っ子とは目されない」とは、すなわち江戸で三代続く家が少数であったことの裏返しであるが、江戸でも芝浦でも話は同じ、いつの時代でも新しく入ってくる人は常にいたわけであり、相互に手を伸ばし合いながら暮らしてきた。

数年後には一気に地域人口を倍増させることになる“新住民”との接点の持ち方を用意しておかなければならない。そのためにも、誇りうる地域コミュニティの姿が目に見えるものとして形作っておきたい、という地域住民たちの思いは当然のことであった。先輩たちと同じことをやるだけのことだ、と。その中心となったのが、芝浦海岸町会商店会連絡協議会である。町会と商店会が一体のものとなって活動していることにこの会の特徴がある。

地域の相互扶助や自治、防犯、衛生管理的な成立の仕方をする多くの町会と、地域の個人商店の商行為の連携や協調、秩序維持などを目的とする商店会では、その成立目的が異なる。行政組織の中での位置付けも、町会が土木・まちづくり系のセクション、商店会が商業・産業振興系のセクションと異なっており、結果として両者の接点が少ない地域も多いと聞く。しかし芝浦では以前より、氏神を共にする町会と商店会とが協調して神社祭礼を執り行ってきたという経緯があった。むろん各町会相互の交流が密であったことは言うまでもない。

先の漠たる焦燥感をもっとも敏感に感じ取っていたのは、地域の活力と自身の経済基盤とが直結している商店会の個人商店主たちであり、彼らが試行した芝浦運河まつりのイベントという呼び水を、共有できる土壌があったということである。

これだけの積み重ねがあるのだから“やる”となったら人材は豊富である。行政、警察、消防などへの折衝

や各種届出は誰、小学校その他の教育機関との関係は誰、企画の取りまとめは誰、陣頭指揮は誰、お金の工面は誰、周辺企業への協力要請は誰、と連絡協議会や実行委員会の指揮下、適材適所で動く様は「芝で生まれ神田で育ち」の土地柄の面目躍如、まさしく「嫌いじゃやてらんない」のである。

#### 4—地域の資産、地域をあそぶ

地域に「四町会一商店会がある」ということは、すなわち何かにつけて行事が複数開催されるということである。春のお花見は場合によってはかけもち。夏のお祭りシーズンは7月半ばから8月頭まで、毎週末どこかのまちかどで盆踊りや模擬店が賑わいを見せる。暮れのお餅つきも毎週。またこの地域は、町会によって異なる二柱の氏神様をお祀りしているので御神輿も2度出る。つまり芝浦に暮らす人々は、通常の2～3倍ものイベントを楽しめるわけである。

お祭りやイベントを「ハレ」と称し、日常の「ケ」を底支えするための重要なトピックと位置付け、地域住民たちをまとめるために必要不可欠な「制度」と捉える理解が一般になされるが、まさしく芝浦でも、そうやって町会商店会の交流は深まってきたのであるし、今後“新住民”たちへも広がってゆくであろう。

これら町会単位の各種行事の延長上に、5団体が一体となって行われるのが「芝浦運河まつり」であるが、これ以外にも5団体全体としての取り組みは多い。

例えば、都内に唯一残る木造の見番「芝浦・協働会館」は、1936年に築造され100畳敷大広間がある。この建物の保存・利活用を願う住民活動は、地域外の人々や専門家たちの賛意も得て東京都議会、港区議会への請願および採択という形で、現在進行中の大切な活動である。

埋め立て地であるが故に歴史を物語る事の少ない芝浦にあって、貴重な文化遺産である。

また、運河沿いに広がる緑道を、専門家のインストラクションを受けながらの散策、植物や昆虫、鳥など様々な生き物を観察して歩く自然観察会、新聞作りのワークショップ開催、運河沿いに自生する夏みかんをマーマレードやアイスクリームやお菓子にする、同じく自生するピワをジャムにするといった楽しみ方の発見など。あるいはさらに運河に出でる自然観察や体験などをおこなう芝浦小学校の校外授業のバックアップも、地元企業有志の連合体の手で続けられている。

オリジナル演歌CD「芝浦運河」の製作・発売や、オリジナル日本酒「芝浦運河」「運河物語」の販売などに加えて、遊歩道でのカフェテリアなどは、商店会ならではの取り組みである。

むろん課題を感じていないわけではない。まず、このたくさんのイベントをどのように切り盛りしてゆくのか、そのパワーの持続方法である。見渡してみると、どのイベ

ントでも動いているのは同じような顔ぶれであり、正手一杯、という声も聞こえないわけではない。イベントの数や規模が拡大するにつれて、必然的に増えてくる登場人物たちの、モチベーションや思惑などの交通整理にも配慮を要する。

また、芝浦の人々は仲がよい。同じ芝浦小学校の卒業生でもあり、町会や商店会の活動で毎週のように顔を合わせて、飲みかつ語り合うという事が、ややもすると入りにくさと感じられることもあるかもしれない。実は意外とシャイな芝浦の人たちのこの仲の良さが、内にのみに向かず、より積極的に外に向けられたならば心強い限りである。

せっかくの耳目を集めるイベントが、一過性の、あるいは流行に寄りかかったものとなってしまうまいよう、日常的な地に足の着いた活動に繋げてゆくことが大切なのだと感じられる。

#### 5—さてこれから、もう100年

たかだか100年程度の歴史しかない芝浦の地にあって、今も町会や商店会で活躍の諸先輩方の中には、若い頃にこの地に居ついた、いわゆる初代の方々も多い。地域に受け入れてもらった経験と、地域として受け入れてきた経験。彼らの見てきた過去の芝浦の延長上に、今の芝浦は、これからの芝浦はどのように見えているのだろうか。数十年かかって今の姿があるのならば、その微調整にも数十年かかると考えるのが順当なところ。拙速に目先の成果を急ぐ愚を犯す必要はなかろうと、まずはゆったりと構えていよう。

その都度微調整をしながら継続してゆくこと。そのために、できる“人”ができる“こと”をする。永遠に現在進行形というのがまちの健全な姿なのだろう。



■写真8—自然観察会でつくった新聞は小学校や田町駅、町会各所に掲示  
■写真9—自然観察会でやった「ネイチャーカラービンゴ」。自然の色のグラデーションに驚かされる